

猫は悪獸にて、牛馬犬猿雞の類にあらねど、鼠といへる賊獸を征伐する事、猫にしくものなし、禮記に、迎猫爲其食、田鼠也といひ、説苑に、騏驎駢倚、衡負、輓而趨、一日千里、此至疾也、然使捕鼠、曾不如百錢之狸、云々とある、狸は則猫なり、和名抄に、猫、禰古万、似虎而小、能捕鼠爲糧とあり、家猫ともいへり、

〔物類稱呼動物〕猫ねこ 上總の國にて山ねこと云これは家に飼なり關西東武ともにのらねことよぶ、東國にてぬすびとねこ、いたりねこともいふ、

夫木集

まくす原下はひありくのら猫のなつけがたきは妹がこゝろか

仲正

この歌人家にやしなはざる猫を詠せるなり、又飼猫を東國にてとらと云、こまといひ、又かなと名づく、

今按に猫をとらとよぶは、其形虎ににたる故に、とらとなづくる成べし、和名ねこま下略してねこといふ、又こまとはねこまの上略なり、かなといふ事は、むかしむさしの國金澤の文庫に、唐より書籍をとりよせて納めしに、船中の鼠ふせぎにねこを乗て來る、其猫を金澤の唐ねこと稱す、金澤を略してかなとぞ云ならはしける、中今も藤澤の驛わたりにて、猫兒を囉ふに、其人何所猫にてござると問へば、猫ぬし、是は金澤猫なりと答るを常語とす、中又尾のみじかきを、土佐國にては、かぶねこと稱す、關西にては、牛房と呼ぶ、東國にては、牛房尻牛房といふ、東鑑五分尻五分尻とあり、

〔源氏物語三十四〕から猫のいとちいさくおかしげなるを、すこしおほきなる猫のをひつゞきて、

俄にみすのつまよりはしり出るに、人々おびえさはぎて、そよくとみじろきさまよふけはひども、きぬの音なひみ、かしましきこ、ちす、猫はまだよく人にもなつかぬにや、つないとながくつきたりけるを、ものにひきかけまつはれにけるを、にげんとひこしるふ程に、みすのそばい